

英和幼稚園を創った婦人宣教師

梅 染 信 夫

目 次

目次・凡例	263	VII エリザベス・ミリケン背景	269	XIV 英和幼稚園における保育実践	276
I 序論 英和幼稚園という奇跡	263	VIII フレーベルの幼児教育理論	270	XV フランシナ・ポーターの辞任	278
II 英和幼稚園を創った3人の婦人宣教師	264	IX フレーベル教育理論の批判的受容	271	XVI ルーサー園長とフルトン園長の時代	280
III フランシナ・ポーター背景	265	X エリザベス・ミリケンの来日と着任	272	XVII ジャネット・ジョンストン背景	281
IV フランシナ・ポーターの発想と始動	266	XI エリザベス・ミリケンの指導	273	XVIII ジャネット・ジョンストンの人柄と教育観	282
V フランシナ・ポーターとマリア・ツルーと吉田えつ	267	XII 吉田えつの幼稚園保育科卒業と英和幼稚園の開設	275	XIX ジャネット・ジョンストンの働き	283
VI マリア・ツルー、エリザベス・ミリケンを発見	268	XIII 英和幼稚園園舎の完成	275	XX 結論 英和幼稚園のキリスト教教育	285

凡 例

- ◇ 〈 〉 は引用を示す。引用はつとめて原文どおりとした。ただし旧活字で漢字や仮名を現代表記に書き換えた箇所がある。聖書の引用には通称「口語訳」（旧約1955年、新約1954年）を用いた。
- ◇ 〈 〉 は注記である。元号・年、出典などは半角の 〈 〉 で示した。出典の中の「 」は書名である。出典の発行所は割愛した。人名や地名などで重要なものにはスペリングを併記した。
- ◇ [] は筆者が挿入した部分である。

I 序論 英和幼稚園という奇跡

「英和幼稚園」は現在の「北陸学院短期大学附属第一幼稚園」の前身である。

この私立の幼稚園は1886年(明治19)10月11日にアメリカ長老教会婦人宣教師フランシナ・ポーターによって金沢に開設され、1912年(明治45)に同婦人宣教師ジャネット・ジョンストンなどによって北陸女学校附属幼稚園と改称され、1950年(昭和25)に同婦人宣教師アイリン・ライザーなどによる北陸学院短期大学の発足に伴い、北陸学院短期大学附属第一幼稚園となった。

〈この幼稚園は桜井女学校附属幼稚園、ブリテン女学校幼稚園の次に誕生したキリスト教主義幼稚園である〉(「日本キリスト教保育百年史」, 1986, p. 52) が、〈桜井女学校附属幼稚園、ブリテン女学校幼稚園……が途中で休園したため、この幼稚園は現存する最古のキリスト教主義幼稚園……となっている。〉(小林恵子「日本の幼児保育につくした宣教師・上巻」, 2003, p. 203)

(注)桜井女学校附属幼稚園は桜井ちか(1855~1928)が1876年東京麹町に開いた家塾が桜井女学校となり、1880年これに幼稚園が付設されたもの。その後マリア・ツルーは米国長老教会の所有として運営した。ブリテン女学校幼稚園は、1880年メソジスト教会婦人宣教師ハリエット・ブリテンが横浜に開設したブリテン女学校に付設された幼稚園。

梅 染 信 夫

英和幼稚園が開設されたのは、キリシタン禁令の高札が撤去されて僅か10数年しか経っていない明治初期のことであった。

北陸というのは湿度が高く、冬が長い気候の土地である。

北陸の中心地である金沢はもと加賀百万石の城下町であり、その長い歴史と輝かしい伝統を守る一般の人々の習慣、制度、思考様式などは概して保守的なものであった。

北陸地方は、宗教的には、蓮如上人の布教以来600年の間、浄土真宗の金城湯池であり、古くから民衆の間に真宗信仰の強固で甚大な影響が認められた。いわゆる「仏教王国」である。この王国に入り込もうとする異教の「耶蘇」（イエスの音訳）は邪教である。キリスト教がこのようなものとして排斥されたのは当然のことであった。

市井の人は「幼稚園とかいって、おんなの唐人が子どもを集めて何やら訳のわからないことを教える」と聞いて、眉をひそめ、気味悪がったにちがいない。

その頃、「おんな」「こども」の人権は認められていなかった。また西洋人は「唐人」「毛唐」「異人」などと呼ばれ、〈唐人の学校に入ると、いまに麻酔をかけられ、籠のようなものに入れられて突き殺される！〉というまことしやかな噂さえ流れるほどであった。（『北陸学院百年史』, 1990, p. 81）

金沢にキリスト教の幼稚園が開設される必然性はなかった。いわゆる偶然性が作用したとも考えられない。しかし、その時代に、そこで、「無から有が生じた」のである。そしてその幼稚園はそこに根づいただけでなく、わが国における最古の幼稚園として120年の長きにわたって存続し、現在も先進的な幼稚園として幼児教育の研究と実践活動を行っている。

そのような幼稚園であることの不思議さ、それはまさに「奇跡」と呼ばれるに相応しい。

本稿は、その英和幼稚園という奇跡がどのようにして起ったか、またその奇跡がなぜ起ったかについて研究するものである。

Ⅱ 英和幼稚園を創った3人の婦人宣教師

現存する最古の幼稚園の設立というその不思議な事柄がなぜそのとき、そこで生起したのか。

筆者は、端的に、そのとき、そこで、それを創るに相応しい人たちがいたからであると考え。それを創るに相応しい人たちとは誰か。それは英和幼稚園の創立に関わった人たちであるが、筆者は、その人たちの中で最も重要な働きをしたのは次の3人の婦人宣教師であったと考える。すなわち、先ず1880年代の半ばに、北陸の金沢に幼稚園を設立することを発想したフランシナ・ポーターであり、次にフレーベル教育理論を紹介・導入し、英和幼稚園の主任保母となる者を養成したエリザベス・ミリケンであり、さらに英和幼稚園の内容を充実し、発展へと導いたジャネット・ジョンストンの3人である。

以下、それぞれの背景とその果たした役割りについて述べるが、叙述の対象となる時期としては、フランシナ・ポーターが来日した1882年から、それが北陸女学校付属幼稚園と改称された1912年に至るまでの30年間を対象とする。

Ⅲ フランシナ・ポーターの背景

英和幼稚園を発想し、設立したのはフランシナ・ポーター(Francina E. Porter)であるが、彼女はどういう人であり、どのようにして英和幼稚園を発想することになったのか。

フランシナ・ポーターは1859年アーカンソー州の最東端の町ブライズヴィル(Blytheville)に生れた。兄ジェームズ・ポーターが宣教師になり、フランシナも婦人宣教師になり、下の妹もシカゴで都市伝道に従事することになったことから、彼らの父が長老派の牧師ないし宣教師であった可能性があると思われる。(「北陸学院百年史」, p. 125)

(注)出身地の町の名について、「北陸学院百年史」には「テネシー州ブライズヴィル」とあり、「ニューヨーク合同長老教会本部保管の記録」には Riceville, Tennessee となっているが、代表的な地名辞典 WEBSTER'S GEOGRAPHICAL DICTIONARY, published by G. C. Merriam Co. 1959などにも該当するものが見出だされないで、本稿ではテネシー州との州境に位置するアーカンソー州ブライズヴィルと特定した。

ブライズヴィルは、そこで多量の綿花が栽培・生産され、加工された衣料をはじめ自然林の伐採による材木などの取引が大々的に行われ、鉄道が通っていて交通が便利な、人口3000くらいの町であったと思われる。

彼女の出身地には幼稚園はなかったであろう。フランシナはブライズヴィルの初等学校、そしてハイスクールを出たあと、テネシー州メアリーヴィル(Maryville)にある長老教会立のメアリーヴィル・カレッジに入学し、教育学(Education)を専攻した。将来は初等教育ないし女子教育に従事したいと思っていたのではなかろうか。

(注)アーカンソー州には1871年創立の州立アーカンソー大学があったが、州の最西端のフェイエットヴィルという町にあり、そこはブライズヴィルから700キロの遠隔の地であった。また、テネシー州には1794年に創立された州立テネシー大学があり、そこは全米で最も早く男女共学制を採用した大学であったが、1807-93年には男子のみを受け入れ、女子を受け入れなかったため、フランシナが入学して学ぶことは不可能であった。

フランシナは1881年にカレッジを卒業したが、兄のジェームズが宣教師として日本に来ていたことから、フィラデルフィア長老教会婦人伝道局に申請し、婦人宣教師となり、1882年(明治15)12月に来日した。そして次の年に金沢へ来て、兄が経営する「愛真学校」という私立男子中学校で教えるはじめた。

愛真学校で教えていて、彼女は同僚の婦人宣教師メリー・ヘッセルが「金沢女学校」を開設するのを目の当たりにする。その女学校というのは、メアリーヴィル・カレッジの講義の中にも出てきた「マウント・ホリヨーク方式」であるという。フランシナにとってメリー・ヘッセルは6歳年上であるが、姉のように優しく、しっかり者で、「教師のかがみ」のような存在だったのではなかろうか。フランシナは彼女に親しみを感ずる以上に尊敬していたらしい。

実は、金沢に来る前には、彼女自身が金沢に女学校を設立し、女子教育を行いたいと思っていた。そして、兄のポーター宣教師もこの妹の意志を実現させたいと思っていたことが彼の海外伝道局あての報告書に表明されている。(James Porter's report, Sept. 3, 1887)

しかし、フランシナ・ポーターは「女学校」の方はメリー・ヘッセルにまかせ、あらためて、金沢における初等教育と幼児教育のための「子供たちの学校」(Children's School)を発想するに至った。彼女がこのことを発想したのは1883年(明治16)晩夏のことであったと思われる。

梅 染 信 夫

IV フランシナ・ポーターの発想と始動

明治維新になってわが国に新しい学制が制定されたのは1872年(明治5)であるが、それが普及を見るまでには相当の年月を要した。

当時、金沢には、私立の小学校が一枚もなかった。幼稚園が皆無だったことは言うまでもない。

フランシナ・ポーター自身は幼稚園教育を受けた経験がなかったが、彼女はカレッジで教育学を専攻し、初等教育全般について学んでいたし、幼児教育についてもある程度の知識を得ていたにちがいない。

このことを例証する資料がある。兄のジェームズ・ポーターが長老教会海外伝道局に宛てた文書の中に、彼女が所属するフィラデルフィア婦人伝道局の人たちが日本の学校教育がウィリアム・ハリス(William T. Harris) [p. 10]の教育理論に基づいて行われることの利点についてフランシナ・ポーターが述べたことに関心を寄せたと記されている。(James Porter's report, *ibid.*)

フランシナ・ポーターの発想による「英和幼稚園」が始動した。

彼女は先ず兄のジェームズに相談した。ジェームズは妹の「子供たちの学校」の案に賛成し、彼女の並々ならぬ熱意を感じ取ったのではなからうか。彼はフランシナが以前、果たせなかった女学校設立の夢に代って「子供たちの学校」の夢が生れたことを喜んだにちがいない。

ジェームズ・ポーター宣教師は先輩格のトマス・ウイン(Thomas C. Winn) 宣教師とイライザ夫人にこのことを相談したであろう。ウイン宣教師夫妻はこれに賛成であった。

ポーター、ウイン両宣教師は日本人の関係者とも協議し、話し合ったものと思われる。その関係者とは、愛真学校の事務担当だった三野季暢、金沢教会長老で金沢市の名士だった水登勇太郎、殿町教会長老の阿閉政太郎などだったであろう。

彼らの協議した主な事項は次のようなものであった。〔「北陸五十年史」, 1936, pp. 106, 308〕

名 称：英和小学校・英和幼稚園

開設時期：1885年(明治18)、遅くとも1886年(明治19)

開設場所：金沢市の中心地で通学・通園に便利なところ

規 模：小学校(尋常高等科を含む) -- 児童70名、幼稚園 -- 園児40名

保育料等：入園料 -- 50銭、保育料 -- 月額50銭 [小学校の分 -- 不詳]

募集方法：①新聞広告、②チラシ配布、③ポスターを貼る、④友人・知人に知らせる

教員採用：フランシナ・ポーターが、トマス・ウイン、三野季暢、水登勇太郎、阿閉政太郎などと相談し、候補者と面談して決める

財政負担：フランシナ・ポーターが英文の「小学校教育事業概要書」を書き、トマス・ウイン宣教師とジェームズ・ポーター宣教師の連名で海外伝道局(Mission Board)に補助金を申請する

(注)当時、幼稚園事業や孤児院事業に対しては補助金を支出しないのがミッション・ボードの方針であった。宣教師などが直接伝道し、教会を建設することが第一の目的であった。このような事情であったので、フランシナ・ポーターの海外伝道局などへの報告書・文書には Kanazawa Christian School for Children, Kanazawa Children's School, Children's School などの名称が用いられている。

V フランシナ・ポーターとマリア・ツルーと吉田えつ

フランシナ・ポーターがトマス・ウイン宣教師の紹介状を携えて東京麹町の桜井女学校にマリア・ツルーを訪ねたのは1883年(明治16)初秋のことであつたと思われる。

(注)ウイン宣教師が4年前に石川県中学師範学校で理科・英語を教えることになった時、マリア・ツルーもまた同じ学校で英語を教えることになった。このように二人は知り合いであつた。また、トマス・ウイン宣教師とイライザ夫人が設立した私立男子中学校「愛真学校」(後の「北陸英和学校」)はマリア・ツルーが彼女の宿舎で数人の女の子に英語を教えていた私塾が一つのヒントになったものと考えられる。

フランシナ・ポーターは桜井女学校の盟主ミセス・ツルー(Maria True)に会った。フランシナはミセス・ツルーの教え子が感じたのと同じ印象をもったのではなかろうか。(彼女には見識があつた。彼女には落着きがあつた。彼女は自ら潜んで、他を立たしむる雅量があつた。そしてこれら凡てを包む深い信仰と愛とがあつた。)(久布白落実著「矢嶋楯子伝」, 1935, p. 162)

ミセス・ツルーはトマス・ウイン宣教師からの紹介状を読んだのち、フランシナから英和幼稚園の概要を聞き、肝要なことについて親切に助言したらしい。

〈ミス・ポートルの曰く、設立するなら完全な幼稚園をとツルー先生が申されたとて一生懸命なりし……〉(「北陸五十年史」, p. 312)。これは金沢女学校の第一回卒業生で、後に英和小学校の教師になった中村直という女性が記憶していたことである。

その時の出会いにおいて両者の間に次のような約束が交わされた可能性がある。すなわち、ミセス・ツルーは一年間の休暇で間もなく帰米するが、その次の年に幼児教育の専門家が「桜井女学校幼稚保育科」に着任する予定であり、その幼稚保育科の課程の修了生を金沢の英和幼稚園の主任保母として採用するというツルーの提案に対して、フランシナが同意したということである。

次いでミセス・ツルーは、主任保母になる候補者について尋ねるようと、桜井女学校の矢嶋楯子先生を紹介したと思われる。

フランシナは矢嶋楯子校長代理に会った。矢嶋先生は小柄ではあるが、幾多の人生の辛苦を耐え抜いて来た「苦勞人」のように映つたのではなかろうか。

矢嶋先生は親切に、またねんごろに対応してくれ、築地の海岸女学校にいる知人が情報を持っていろいろから、彼女と連絡を取り、後日フランシナあてに連絡すると話したと思われる。

矢嶋先生から連絡の手紙が来たのは翌1884年のおそらく3月頃だったのではなかろうか。それには、4月に転勤となるのでそれ以降にしてほしいのだが、横浜にある聖經女学校の教師の稲垣すえに会って尋ねるのが最善の策であろうと書かれてあつたと思われる。

4月になるとすぐ、フランシナは横浜に出向き、稲垣すえに会った。

このときの面談の様子を当の吉田えつが後日述懐したものから引用する。

〈北陸に幼稚園を建てたいのだが誰か手伝ってくれる人はなかろうかと相談されたのがミス・ポートルでありました。稲垣さんは一寸^{ちよっと}思い当たる人もないので「先生一所に祈ってみませう」と二人で祈り初められました。すると胸に浮んだ顔が私であつたと云ふので早速ポートル先生に話して賛成を得るなり手紙を書いて寄こしました。殊に北陸に行く前に東京へ桜井女学校……の先生に就て幼稚園の保母科を修業して来て貰ひ度いと事です。〉(「日本基督教幼稚園史」, 1941, p. 97)

手紙を読んで、吉田えつは大いに悩んだらしい。愛知県立女子師範学校における同級生であり、

梅 染 信 夫

親しい友人でもある稲垣すえからのせつかくの推薦であるが、キリスト教の幼稚園で教えるという話を聞けば、両親をはじめ知人や友人から必ず反対されると思ったからである。師範学校を出て、いま小学校の先生をやっている。[あるいはその頃、彼女に結婚話があっても不思議ではない。] いまさら、東京へ出て行って、何を勉強し、何になろうというのか。

(注)県立の師範学校を卒業した吉田えつは当然小学校の先生になっていたはずであるが、この点についての資料は不足している。また、当時、幼稚園とそこにおける保育の必要性和重要性について、吉田えつの両親のみならず、一般の人々の理解は極めて低いものであった。

資料にはないが、しばらくして、フランシナ・ポーター自身が名古屋へ出向き、直接、吉田えつと面談した可能性がある。もしそうであったら、フランシナは吉田えつが典型的な日本人女性であり、英語が少し通じ、聡明で、意志の強い、教養のある女性であることが分かって内心、安堵したであろう。フランシナは吉田えつに対して、桜井女学校幼稚保育科で学ぶための1年分の学費・生活費、他に所要の旅費を負担する用意があると告げ、誠意をもって熱心に説得し、勧誘したであろう。吉田えつはフランシナの熱意あふれる言葉に圧倒されたのではなかろうか。

吉田えつは、実は、その頃、大阪か東京かへ出て見たいとも思っていたらしい。また彼女自身はキリスト教について抵抗感はほとんど感じていなかったらしい。〈吉田は名古屋の鍋屋町の講義所で植村正久の説教を聞くなど、キリスト教に理解をもっていたから、ポートルの要望にすすんで応じることとなった。〉(『日本キリスト教保育百年史』, p. 54)

(注)植村正久(1858-1925)はJ. パラの私塾で学んでいてキリスト教に入信。ブラウン塾で学び伝道者となった。彼は富士見町教会を設立し、また東京神学社(東京神学大学の前身)を創立して日本人の伝道者の育成、自給独立の日本の教会の形成と日本における伝道のための神学の形成に当たった。

VI マリア・ツルー、エリザベス・ミリケンを発見

1883年(明治16)の秋、マリア・ツルーは1年間の休暇を取って米国へ帰った。彼女のなすべき事は多々あったが、その一つは、彼女の後を継いで桜井女学校幼稚園の園長となり、幼稚保育科で保母を養成する教師を見つけることであった。彼女は最適の人を求めて、熱心に探した。

アメリカの幼稚園の成立と発展について最も包括的な論述といわれるニーナ・ヴァンデウォーカー(Nina C. Vandewalker)という学者が書いた THE KINDERGARTEN IN AMERICAN EDUCATION (MacMillan Co., 1908) という本があり、その中に次のような記述がある。

〈「私たちのところへ来て助けて！」保母たちは、外国からますます頻繁にこう呼びかけられている。国際幼稚園連盟がミルウオーキーで開いた会合でも、戦略上とても重要なポジションに着くべき保母を養成する教師を東京に派遣するよう強く求められたが、適当な人物が見当たらなかった〉[という報告がなされた]。 (pp. 89-90)

筆者は、この「戦略上とても重要なポジションに着くべき保母を養成する教師を東京に派遣するよう強く求めた」のが他ならぬマリア・ツルーであったと想像する。

マリア・ツルーの活動の拠点は、その地理に詳しいフィラデルフィアであったと考えられる。彼女は当時のフィラデルフィア婦人伝道局実行委員のパーキンズ夫人(S. C. Perkins) やニューヨーク婦人伝道局局長のグレアム夫人(Julia Graham)に相談したにちがいない。また、出身地シラキュ

ースにある教会の婦人会にも連絡を取ったであろう。その他、友人、知人に対して、そのための候補者を推薦してくれるように依頼したものと思われる。

そしてマリア・ツルーはついにエリザベス・ミリケンを発見する。その後の二人の関係と活動を知る者にとって、その発見は奇跡的であったと言っても過言ではない。その不思議な発見と展開の経緯を記した資料はないが、とにかく、二人は運命的に出会った。1884年初夏のころ、フィラデルフィアでのことであったと思われる。

VII エリザベス・ミリケンの背景

エリザベス・ミリケン(Elizabeth P. Milliken)は1860年、長老派の教会の牧師サミュエル・ミリケンの娘としてフロリダ州クインシー(Quincy)に生れた。

クインシーは、フロリダ、ジョージア、アラバマの州境が交わるところに位置し、森と湖に囲まれた美しい町で、別名 Florida's Queen City と呼ばれる。古くからタバコが栽培され、当時の人口はおよそ2000、その半数ほどがタバコ産業に従事する黒人奴隷であったと思われる。

彼女が幼児の頃、米国史上最も大規模で不幸な内戦、南北戦争(1861-65)があった。南北両軍の死者の数は62万人余り、主として南部諸州から逃亡した奴隷の数は400万人に達したといわれる。

戦争が終わった次の年、エリザベスは6歳になっていたが、父がペンシルベニアへ転任となり、ミリケン一家はフィラデルフィアへ移転し、エリザベスはそこの小学校に入学することになった。

彼女は聡明であった。学校では国語(English)と音楽の非凡な才能が評判になったかもしれない。彼女は〈小柄で色白の顔に淡い黄色の髪の毛をしていて、性格が明るく、進取の気性に富んでいた。若い頃……は挙動が活発〉(小林恵子 同上, p. 180)であった。

エリザベスは7年間、小学校で学び、その後、ハイスクールへ進んだ。当時のハイスクールは、それよりさらに上級学校に進む人だけのための教育制度であった。

ハイスクールで学ぶようになった頃から、彼女は教会の日曜学校の教師をやりだした。相手は小学校レベルの子供たちである。腕白な男の子もいれば、おませな女の子もいたであろう。そんな子供たちと一緒に子ども讃美歌をうたい、聖書の物語を話して聞かせた。クリスマスには子供たちのページェントを演出した。イースターには子供たちと競ってイースター・エッグを捜した。

日曜学校の教師になって間もなく、彼女は父ミリケン牧師に申し出て、かなり長期の準備期間を経たのち、教会の礼拝において信仰を告白し、それ以降、聖餐に与^{あず}かることができるようになった。

(注)エリザベス・ミリケンについて、「日本キリスト教保育百年史」(1986)、「日本キリスト教歴史大事典」(1988)などは「女子学院の歴史」(1985)を資料としているが本稿では WHO'S WHO IN JAPAN, ed. by Shunjiro Kurita(1913)を資料とした。

1877年、ハイスクールを卒業したエリザベスは今度はアラバマ州のグリンズボロ(Greensboro)という町にあるサザン大学(Southern University)に進学した。

グリンズボロは1816年頃にヨーロッパから来た移民が綿花を栽培し、材木を切り出した人々の作った町であり、当時の人口はおよそ2000程度であったと思われる。

サザン大学は1856年にメソジスト教会によって設立された4年制の男女共学の大学である。

梅 染 信 夫

(注)このサザン大学は、1898年に設立されたバーミンガム・カレッジ(Birmingham College)と1918年に合併してバーミンガム・サザン・カレッジ(Birmingham Southern College)となり、名門校として現在に至っている。

エリザベスがなぜアラバマ州にあるサザン大学を選んだのか。その理由として次のようなことが考えられる。

①父ミリケン牧師とメソジスト教会立のサザン大学との間に何らか特別の関係があったかもしれない。その頃、次のような事例があった。すなわち、父がカレッジや大学の設立に当たって寄付をするか、学校債を購入することによって、その一族の誰かがその大学に無条件で入学が許可され、学費の一部が免除されるというもの。(Earnest E. Calkins: THEY BROKE THE PRAIRIE, 1937, pp. 45-46)

②エリザベスはメジャーに古典文学を、マイナーに幼児教育(Early Childhood Education)を専攻することにしていたが、メジャーとして専攻する古典文学の教授陣が揃っていた。

③サザン大学には、メソジスト教会のある金持ちの信者が寄付した立派な図書館と膨大な数にのぼる蔵書があり、文学・生物学の研究に最適の環境が整っていた。

④グリンズボロの町は、彼女が幼少時を過ごしたクインシーから鉄道で10時間足らずのところであり、親近感があった、など。

エリザベスのサザン大学における学生生活が始まった。彼女は古典文学を専攻したが、古典文学の範囲とは広範なものである。彼女が特に関心があり、研究したかったのは「英詩」であったかもしれない。

ここで、エリザベスと英詩との関わりについて少し調べてみることにする。

桜井女学校におけるミス・ミリケンについて次のような追想記がある。

〈この方は香り高い詩人のやうな方で、心ある人はこの先生の英詩観賞の組を無上に楽しんだものである。〉(植村環「父母と我ら」、佐波亘編「植村正久と其の時代・第二巻」、1938, p. 785)

“The verses from the Psalms and passages of the New Testament as well as the great poems in English and American Literature which she made us memorize during our school days have meant such rare treasures which no air raids, fires nor any other misfortunes can take away. . . . I often think of the lovely summers Miss Milliken, Miss Mitani and I had in Yamada hot spring where we spent happy days reading the Bible, Browning, Tennyson and Shakespeare, discussing them, and in taking long walks.”

(谷岡貞子「ミス・ミリケンの思い出」, 「女子学院八十年史」, 1951, pp. 150-54)

[訳:「詩篇の詩と新約聖書のことばは、私たちが学生だったころ、彼女によって暗誦せられたイギリス文学、アメリカ文学の優れた英詩と同様に、いかなる激しい空襲も、火災も、その他のいかなる不幸をもってしてもその価値を減ずることのできない類い稀なる財宝となっている。……ミス・ミリケンと三谷先生とわたしが山田温泉で過ごしたすばらしい夏のことをわたしはよく思い出す。私たちはそこで聖書を、ブラウニングを、テニソンを、シェークスピアを読み、それらについて語り合い、遠くまで散歩するという至福のときを持った。】

VIII フレーベルの幼児教育理論

サザン大学のような私立の大学で幼稚園教師の資格を得るという制度は新しいものであった。サザン大学が開学したのは1856年であるが、アラバマ州にこの教員養成制度が導入され、サザン大学に州から補助金が交付されたのは1873年以後のことであり、エリザベスが教職科目の単位を取得

したのは 1880-82年のことであつたと思われる。(『世界教育史体系 21 幼児教育史 I』, 1973, p. 324)

サザン大学における教職科目は、ヨーロッパ教育史、幼児教育原理、幼児心理、教授法、カリキュラム論、そして教育実習などだったであろう。(仲新監『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』, 1879, pp. 257-58)

このうち特に幼児教育原理について触れなければならない。ミス・ミリケンが桜井女学校幼稚保育科において最も力点を置いて指導したのはこの幼児教育原理だったからである。

その頃の欧米における幼児教育原理とはすなわち「フレーベルの幼児教育理論」であつた。

フリードリッヒ・フレーベル(Friedrich W. A. Fröbel, 1782-1852)は幼稚園の創始者である。

彼はドイツのチューリンゲンのルーテル教会の牧師の子として生れた。幼くして母を失い、伯父の家に引き取られ、奉公に出された頃から自然諸科学、建築学、鉱物学とくに結晶学を学び、岩石の結晶の本質が後に「恩物」(Gabe)^{おんぶつ}を考えつくもとになった。大学は中退したが、そこで接した哲学や自由主義的気風は彼の思想の根底にある理想主義、ロマンチズムを形成し、さらにはペスタロッチ、ルソー、フィヒテなどの思想から影響を受けた。1816年、グリースハイムという所で学校を開き、自らの教育理論を実践に移した。主著『人間の教育』(1826)はその時の体験から生れたものである。彼は1837年に開いた「直観教授の学園」によって幼稚園の基礎を築いた。

(注)「恩物」はフレーベルが考案した幼児のための遊具で、20個の球、円柱、立方体、直方体などから成る。「幼児の中に秘められている創造的な神聖な働きを導くために神が幼児に賜った遊具」という意味から、彼はこのように名付けた。

〈彼の教育思想は、キリスト教と自然諸科学の研究の成果から宇宙万物論の根本的統一としての神性、球の法則などを基盤として展開した。また、教育活動の根源は、子どもの自発的活動にこそあるとし、子どもの遊戯や作業活動をとくに重視した。とりわけ、遊びの教育的意義について先駆的役割を果たした。〉(西頭三雄他『保育原理』, 1992, p. 65)

IX フレーベル教育理論の批判的受容

エリザベス・ミリケンはサザン大学で「フレーベルの幼児教育理論」を学び、それを受容せざるを得なかった。当時、その教育理論は「絶対的」と呼べるほど権威のあるものだったからである。

しかし、大学における学問の対象としてのフレーベル理論は「絶対的」ではあり得ない。講師は学問的に講義し、その問題点を指摘したであろうし、エリザベスなど学生はそれを批判的に受容したにちがいない。

次にフレーベルの幼児教育理論から二つの問題点を取り上げる。

①フレーベルの凡神論的傾向と自然神秘主義

フレーベルは彼の『人間の教育』の冒頭で次のように言っている。

〈すべてのものの中には、一つの永遠の法則が宿り、働きそして支配している。この法則は、外的なものすなわち自然にあつても、内的なものすなわち精神にあつても、またこの両者の統一すなわち生命にあつても、同様につねに明らかにあらわれている。……すべてのものを支配するこの法則の根底には永久に存在する統一者が存在する。……統一者とはすなわち「神」である。

すべてのものは神性すなわち神から出てきている。そして神聖すなわち神によって制約されてい

梅 染 信 夫

る。神の中に万物の唯一の基礎がある。

すべてのものは神性があるうちに働いているということのみによって存在する。このように、各事物に働いているこの神性がすべてのものの本質なのである。〉(P. モンロー「教育史概説」川崎源訳, 1957, p. 7)

フレーベルは〈ドイツ観念論、ロマン主義の影響を強く受け、自然に内在するのと同じように、神的な力が幼児に宿ることを信じ、知・情・意にわたってその力を発揮せしめることを第一のこととして主張した。〉(加藤常昭「フレーベル」, 「キリスト教人名辞典」, 1986, p. 1353)

〈われわれはフレーベルのキリスト教理解、宗教理解のなかに大きく欠落している部分のあることを看過しえない。それは人間の罪についての認識、すなわち贖罪論の欠落であり、そこから生ずる終末論の欠如である。罪と贖罪論がないことは人間の実存のもつ問題への認識あるいは人間存在の矛盾についての認識において楽観的であることを意味する。また終末論的認識の欠如は歴史意識の欠如あるいは未来への楽天的理解を意味する。その意味においてフレーベルの理解は現実の問題を捨象することによって成り立つ理想主義といえる。フレーベルの幼稚園が幼児への教育の場として受け入れられ、成果をもちえたのはその理想主義によるのであり、またそこにフレーベルの教育が幼稚園の段階以上には展開されえない理由があると考えられる。〉(「日本キリスト教保育百年史」, pp. 25-26)

②フレーベル主義の形式化と固定化

シンシナチ市教育長ウィリアム・ハリスに招かれて、アメリカに初めて公立幼稚園を開設したスーザン・ブロウ(Susan Blow)がこのように言ったことがある。

〈フレーベルは、伝統的な玩具の中から最も教育的価値のあるものを選択し、それらを秩序づけてその使用法を案出した。……街での遊びや無分別に用いられている玩具をふたたび尊重しようとする傾向は教育的後退であると言わなければならない。〉(from KINDERGARTEN EDUCATION in MONOGRAPHS ON EDUCATION IN THE UNITED STATES ed. by N. M. Butler, 1900)

このような主義・主張の絶対視は教条主義につながり、形式化へと進むことになりがちである。

上記のブロウの言葉がいみじくも示しているように、当時、行われていた幼児教育において、〈フレーベルの教具に含まれていない玩具は教育的でないとして排斥するまでに、フレーベル主義の形式化・固定化はすすんでいたとみることができる。……1885年、全国教育協会のなかに初めて幼稚園部が設けられたが、その第1回の会合において会長のヘルマンは、幼稚園の教育原理は何であるのかという問題を提起し、幼稚園で行われている恩物至上主義的な教育を批判した。〉(岡田正章他編「世界の幼児教育 8 アメリカ」, 1983, p. 31)

エリザベスがフレーベル主義をどのようなものとして受容したか明らかではないが、その問題の所在を踏まえていたことは想像に難くない。

X エリザベス・ミリケンの来日と着任

エリザベス・ミリケンはサザン大学の4年の課程を修了し、さらに1年間、大学に残って教職課程の未修の単位を取得したものと思われる。そのように計算すると、彼女が両親のいるフィラデル

フィアに帰ったのは1882年初夏のことだったであろう。

しかし彼女は教師にならないで、「アルディナ」という語学学校(Aldine Institute)でフランス語を習ったと資料にある。

なぜフランス語を習ったのか。想像の域を出るものではないが、彼女はカナダの初等学校の教師になることも考慮し、そこで必要とされるフランス語の習得を目指したのではなかろうか。

そうこうしているうちに1884年の初夏となった。そして、おそらく教会関係の人の口コミの情報によって、エリザベス・ミリケンがマリア・ツルーによって「発見」されるのである。

二人は旧知のように出会い、互いに、率直に、大いに話し合ったものと思われる。その時、エリザベスの進路が決まった。彼女は、マリア・ツルーの推薦を受け、フィラデルフィア婦人伝道局に申請し、婦人宣教師となった。そして、正式に日本へ派遣されることになったのである。

1884年(明治17)8月末のことだったのではなかろうか。二人はサンフランシスコで乗船し、太平洋ルートによっておそらく25日間ほどかかって横浜に着いたものと思われる。

そして、その年の9月から、ミス・ミリケンが桜井女学校で英語・英文学を教え、付属幼稚園では園長として園児の世話をし、また、何人かいた保母を指導した。

その頃、ミス・ミリケンが海外伝道局あてに書いた報告書には次のようにある。

〈わたしに〔種々〕教えてくださる〔ツルー〕先生は、番町〔女学校〕の女子の生徒たちに、わたしが来るのを待たせておられたのです。何もかも、事前によく準備されていて、わたしは〔女学校や幼稚園のことを〕よく知るために、一日の大部分を費やすことができます。幼稚園では毎日2時間、指導しています。女学校と幼稚園のかけもちは、一方が他方のための気分転換になるように思われます。〉(Elizabeth Milliken's report, Oct. 9, 1884)

XI エリザベス・ミリケンの指導

ミセス・ツルーとミス・ミリケンが来日した後しばらくしてから〔月日は不明であるが〕、ミス・ポーターは上京し、二人に面談したものと思われる。

ミス・ポーターはミス・ミリケンが人物・識見とも申し分のないものなの分かって、心中、喜んだにちがいない。

彼らは、その後のことについて連絡・調整をはかったものと思われる。その結果、桜井女学校の卒業生で幼稚保育科への進学を希望している富田きんという女性を英和幼稚園が保母見習いとして採用することになった。

1885年1月、富田きんは金沢に来て、ミス・ポーターの助手の仕事をしはじめた。〔「金沢教会員名簿 明治13-32年」, p. 42〕

1885年(明治18)春、吉田えつはそれまで勤務していた名古屋の小学校の教職を辞し、東京麹町にある桜井女学校にやって来て、寄宿舎に入った。

入学式の日となった。他に入学した女性が一人いた。更木きんという女性であった。この日、フ

梅 染 信 夫

ランシナ・ポーターが金沢から上京してきて入学式に参列した可能性がある。彼女は、以前約束したように、吉田えつの入学金・授業料・旅費など全額を支払ったものと思われる。

ミス・ミリケンの幼稚保育科における指導は、その頃アメリカで行われていたものと似通ったものだったのであろう。すなわち〈生徒は助手あるいは実習生として昼間は保育を手伝い、授業は午後や夜間に行われた。授業内容も恩物の扱い方、歌および遊戯の指導など、すぐに役立つ実的なものが中心であった。〉(岡田正章他編 同上, p. 356)

それより2年前の1883年における桜井女学校附属幼稚園における保育内容が分かっている。それは〈フレーベルの二十恩物を使用し、物品科、美麗科、知識科および唱歌、遊戯、説話、体操など〉(小林恵子 同上, p. 179)となっていた。

この「物品科」「美麗科」「知識科」というのは、1880年に初めて付属幼稚園が出来たときの保育科目を踏襲したものである。すなわち、「物品科」は「日用ノ器物即チ椅子机或ハ禽獸花菓等ニ就キ其性質或ハ形状等ヲ示ス」、「美麗科」は「美麗トシテ好愛スル物即チ彩色等ヲ示ス」、「知識科」は「観玩ニ由テ知識ヲ開ク即チ立方体ハ幾個ノ端線平面幾個ノ角ヨリ成リ其形ハ如何ナル等ヲ示ス」ものであった。(「日本キリスト教保育百年史」, pp. 41-42)

ミス・ミリケンとミセス・ツルーの幼稚保育科における指導には、これらについての指導の他に彼らに独特のものがあつた。それは彼女たちが大学における研究や日曜学校で教えた経験、その他に、彼ら自身の感性から得られたものであつた。吉田えつが後年、以下のように述懐している。

〈桜井女学校の校長は矢嶋楯子先生でしたが、特に親切に御世話下さったのはミセス・ツルーでした。何しろ保姆科と云ってもまだ何の教材が整備して居るわけでもありませんが、唯一の教師メリケン先生は米国で保姆の専門学校を卒業した方で誠に熱心に指導して下さいました。そんなわけで日本に於ける唯一の幼稚園専門家と云ふので時々東京女子師範学校の先生方も聴講に来られた程でありましたが、肝腎の生徒と云ふのは更木おきんと私のたった二人きりでありました。

その頃習ひました唱歌に「水車」とか「民草」等と云ふ一般の小學唱歌がありましたが先生は福島と云ふ方で、新しい歌と云へばメリケン先生が英語の歌を譯して教えて下さったもの等でした。〉(「日本基督幼稚園史」, p. 98)

これら〈「水車」も「民草」もフレーベルの「母の歌と愛撫の歌」で、これらは英国のロング夫妻共著による指導書「幼稚園」や米国のダウエイ著「幼稚園記」に遊戯のやり方が説明されている。…フレーベルの唱歌遊戯は歌詞も曲調も純日本式に作り変えたのであつた。……こうした時代にミリケンが米国の幼稚園の歌を原曲のまま〔歌詞や曲調を日本式に作り変えたりして〕教えたことは劃期的なことであつた。〉(小林恵子「日本で最初の保育者養成に関する一考察」, 「国立音楽大学研究紀要 第21集」, 1987, p. 180)

(注)この頃、かなりの数の欧米の民謡、讃美歌などの歌詞や曲が、改作されたり、翻案されたりしてわが国の小学校の教材に採用された事実があるが、幼稚園においてどの程度採用されたかについて調査・研究した文献は寡聞にして知らない。

XII 吉田えつの幼稚保育科卒業と英和幼稚園の開設

吉田えつが幼稚保育科でミス・ミリケンから学んだ期間は1年間であったが、その期間中、吉田えつに特別なことが起った。彼女は、入学すると間もなく、寄宿舎から歩いて行ける麹町教会（現高輪教会）の礼拝に出席するようになったが、その教会の奥野昌綱牧師から洗礼を受けたのである。それはミス・ミリケンが祈り続けていたことであった。彼女が神に感謝する姿が目に見えた。

（注）ミス・ミリケンが出入りし、奉仕していた教会が三つあった。富士見町教会、牛込教会（現牛込弘法町教会）、そして麹町教会である。吉田えつはミス・ミリケンとともに富士見町教会で植村正久牧師[p. 6]の説教を聴く機会があったかもしれない。

奥野昌綱はヘボン宣教師の日本語の教師で、バプティスト宣教師の説教に感激、S.R. ブラウンから受洗し、日本基督教会最初の牧師となり、新約聖書の翻訳、新撰讃美歌の編纂に従事した。

このようにして吉田えつは桜井女学校幼稚保育科を卒業したのだが、名古屋の両親は依然として彼女の北陸行きに反対であった。後年、彼女はこうに言った。

〈明治19年[1886]に保姆科を無事に卒業いたしました時に両親から今さら北陸の田舎になんか行かぬがよいと云って寄こしたり、女〔子師〕範学校からも名古屋に戻って来て母校に教鞭を執っては如何かしきりにすゝめて参りましたが、私としては一たんミス・ポートルにお約束したのでありますからと申して一切の義理や人情を振切って金沢に赴任する事に決心致しました。〉（『日本基督教幼稚園史』, p. 98）

吉田えつと更木きんの卒業式の参列者の中にミス・ポーターがいた。彼女はミセス・ツルー、ミス・ミリケン、矢嶋楫子に対して心からお礼を言い、吉田えつを伴って金沢に向かった。その時、ちょうど、金沢女学校のミス・ヘッセルが、母校ウエスタン女子セナリーからやって来た後輩のローラ・ネイラーを迎えるため横浜に来ていたので、都合一行は4人であった。彼らは汽車、汽船、人力車、川舟などを乗り継いでようやく金沢に入った。途中、コレラの検疫を受け、石炭酸をかけられるという「おまけ」までついた。

吉田えつが金沢に着いて先ず手がけた仕事は英和小学校・英和幼稚園設立の手続きをするという面倒な仕事であったが、彼女はこれを手際よく処理した。その仕事振りを見て、北陸英和学校の男性教師が、女性にしては随分勇敢だと彼女を評したと言われる。

実は、桜井女学校附属幼稚園で実習していた時、吉田えつは頭を働かせ、文部次官に直^{じか}に会って、幼稚園設立に要する手続きについて聞いていた。園児に当時の文部大臣森有礼の息子、また文部次官折田某の令息がいたという幸運があったからである。さらに、英和幼稚園開設の前年に、金沢の有志百余名が「私立金沢幼稚園」を設けようとし、「お役所」がその手続きを経験したばかりだったということもある。因みに、その幼稚園はすぐに経営困難に陥り、程なく閉園となった。

XIII 英和幼稚園園舎の完成

フランシナ・ポーターの夢が現実のものとなった。1886年（明治19）10月11日、彼女のいわゆる「子供たちの学校」が呱呱^{ゐゐ}の声をあげた。英和小学校が開校し、英和幼稚園が開園したのである。

彼らは金沢の中心地、広坂通りに面した民家を月額3円で借りて指導しはじめたのだが、その民

梅 染 信 夫

家では狭すぎることに、また薄暗くて天井窓が必要なことにすぐに気づいた。小学校と幼稚園が大評判となり、岩村という県知事の令嬢2人をはじめ、第6師団長岡本陸軍少将の令息や令嬢など、大勢の親たちが子どもを連れて押し寄せる始末となり、彼らは嬉しい悲鳴をあげるようになった。

ミス・ポーターはこの問題についてフィラデルフィア婦人伝道局に手紙を書いた。するとフィラデルフィアから300ドルが送金されて来た。

(注)〈米国のフィラデルフィア市の某教會總會員400名の方々は毎日毎夜英和小學校[と英和幼稚園]の盛大ならんことを祈りつつ經費補助に盡力してこの300ドルの寄付を集めたと資料にある。〔北陸五十年史〕, p. 309〕

兄のジェームズが100ドル寄付した。ミス・ポーターも100ドルを寄付し、合計500ドルとなった。それで隣接する土地とそこに建っている2軒の家を買い取ったのだが、住んでみると湿気がひどくて、生活するのに支障をきたすほどであった。

ところが、1888年(明治21)に米国長老教会から2人の宣教師がやってきて、校舎・園舎が極めて非衛生的であること、ポーター宣教師の申請した300ドルでは少なすぎることに、目的を達成するには3000ドルを要することを報告書に書いて海外伝道局に知らせた。

間もなく、不思議な事態が開けた。その土地が県の師範学校建築のための敷地として買い上げられることになり、そして代わりに知事が斡旋してくれたのが、同じ金沢の中心地下本多町に、ある金持ちが所有していた広い土地であった。そこには樹齢200年を数える太い樫の木があった。

幸いミッションが補助を認めてくれ、送られてきた3000ドルでその土地を買い取り、小学校と幼稚園と職員住宅を兼ねた2階建の新しい建物がついに完成した。1889年(明治22)のことである。

次の英文は創立50年に当たってミス・ポーターが幼稚園草創の頃を回顧して『北陸五十年史』に寄稿した文章であるが、新校舎に入った教師や園児たちが一緒になって喜ぶ様子が目に浮かぶ。

“It was happy time for us when we opened up our school in the new building. We always had a special time of prayer on Friday morning and on the first Friday after we moved in, the children requested that we have a Thanksgiving meeting for our fine new building.” (フランシナ・ポーター「幼稚園の思い出」, 『北陸五十年史』, p. 306)

[訳:新しい校舎で私たちの授業が始まったときは嬉しかった。金曜日の朝には特別に祈る時間が設けられていたが、新しい校舎に入った最初の金曜日に、子供たちから、新しい校舎のことを感謝する会を持ちましょうと申し出がありました。]

〈美しい園庭と洋館の建物……緑の屋根と白い壁が木々の緑に調和し、気品のあるたたずまいを見せていた。当時であっては何れほどハイカラな西洋建築であったろう。私〔小林〕が勤務した頃〔1951-52〕も園庭には60種類もの樹木があり、新緑の頃になると鶯が木から木へさえずり渡るのを園児と一緒に聞いたものである……〉 (小林恵子「日本の幼児保育につくした宣教師・上巻」, 2003, pp. 214-15)

XIV 英和幼稚園における保育実践

1886年の開設時における園児数がどれほどのものであったか、正確なことは判らないが、園児が民家を一杯にしたことから推し量ると10数人であったものと思われる。

吉田えつによる保育は彼女が桜井女学校幼稚保育科でミス・ミリケンから学んだとおりのもので

あった。桜井女学校付属幼稚園を模範としてのキリスト教保育がなされたのである。

富田さんは、1885年(明治18)金沢に来てミス・ポーターの助手をつとめ、途中1年間上京して桜井女学校幼稚保育科でミス・ミリケンから学んで卒業し、また金沢に帰って英和幼稚園初めての保母として吉田えつを助けた。

(注)富田さんは1889年6月にいったん帰京し、その後にあらかじめ札幌にあるスミス女学校付属幼稚園の保母として赴任した。([「金沢教会員名簿 明治13-32年」, p. 42) スミス女学校は米国長老教会婦人宣教師サラ・スミス(Sarah C. Smith) が1887年、札幌に創立した女学校で、そこで恵泉女学園の創立者河井道などが育った。(小林 恵子 同上, p. 193)

1890年(明治23)頃の英和幼稚園における保育はどのようなものであったか。その頃に英和幼稚園の園児であった越野まさという卒園者が、晩年、娘の節子に当時の幼稚園の保育やミス・ポーターについて語って聞かせたメモが残っていて、頻繁に引用させていただく小林恵子先生の書物にこのように紹介されている。

〈園庭にはブランコが二つあり、その横に鉄輪といわれていたものがあり、腕の力を強くするためにこれにぶらさがるように勧められたがどうしても私にはできなかった。製作では広い園庭に出て種々形の違う木の葉を集め、これを粘土に押し当て、周囲をへらで切り落として遊んだ。また、石盤の上に水を浸した太い毛糸をのせ、箸で動かして色々の形を作ったり、舶来のきれいな艶紙を使ったがその色が鮮やかで美しかった事が思い出される。雪ふかい北陸で冬が長く、室内で楽しく過させるためにいろいろと遊びに工夫がなされていた。リズムでもオルガンにあわせ、男子は長箏を女子は扇子を持ったりして活発に楽しく遊んだ。歌は英語で「農夫の歌」や「飛べ飛べ小鳥」など子ども達はこれらに動作をつけ、意味を理解した。「主、われを愛す」の讃美歌なども英語で歌い、年とった今でもこれらの歌を英語で歌うことができる。あの頃の暖房は北陸地方の教会や幼稚園でよく使われている薪ストーブだった。また、日本便所は子どもが下へ落ちる危険があるので、園児には白い陶器の大きい鉢を便器の下に入れ、鉢は何度も取り替えるようになっていた。〉(小林恵子 同上, pp. 216-17)

ミス・ポーターは日常的に吉田えつに対して側面的な援助を惜しまなかった。彼女は園児がそこで自由に、活発に学び、遊べるように、明るい環境と和やかな雰囲気作りに意を用いたが、それは公立の小学校などから視察に来た人たちを驚かせ、感心させるほどのものであったといわれる。

上記の越野まさの話の続きに戻ろう。

〈ミス・ポートルはユーモアと機知のセンスに富んでいて、朝夕ラッパを吹いて道をいく豆腐屋をみて、これを保育にとりいれ「豆腐 man」というリズム遊びを考案している。その写真をみると、なんと楽しい独創性にみちた遊びであったかがよみとれる。〉(小林恵子 同上, p. 218)

〈英和幼稚園の保育風景が写真として大切に残されている事は得がたい資料である。樹木の茂る園庭の草のうえでお話を聞いたり歌ったりしている子どもたちを写真でみると100年の歳月を感じさせない保育の姿である。また、草原で遊戯をしている園児の姿は日本のわらべうたのような遊びをしているのではなかろうか。当時、幼稚園ではまりなげ、砂いじり、鬼ごっこ等をして遊んだり、劇や遊戯をして楽しく遊んだことがその頃の卒業生によって語られている。〉(小林恵子 同上, p. 219)

このように保育を受けた園児たちは卒園して英和小学校ないし公立の小学校に送り出されてい

梅 染 信 夫

った。その中には文部大臣になった中橋徳太郎、文豪の泉鏡花、ダンテ研究家の中山昌樹などがいた。

園児が卒業するに当たって卒業証書が渡されたが、それには園長の署名のほかにフレーベルが聖書から引用した愛誦句が書かれてあった。「いざや我らが子らと共に生きんかな」。

XV フランシナ・ポーターの辞任

吉田えつは1886年(明治19)から91年までの5年間、北陸において初めて幼稚園を誕生させるといういわば「産みの苦しみ」を味わったが、当初から金沢の気候が体に適さず、脚気にかかって、とうとう主任保母の職を辞し、名古屋に帰郷せざるを得なくなった。

その後任として1892年に着任したのは、吉田えつと同じ桜井女学校幼稚保育科出身の橋本華子である。

その頃の園児募集の広告の文面が残っている。

幼 児 募 集 廣 告

今回本園は内部を装飾し大に修繕を加へ幼児保育の實効を奏せんことを期す

保母は東京麹町女子學院保母練習所卒業生橋本女史

橋本女史は保育の實地に練達して保母の名に背かず

入園希望の父兄諸君は陸續申込あらんことを

金澤市下本多町六番丁三拾三番地内 私立英和幼稚園

〈橋本華子はそれまで女子学院(桜井女学校)附属幼稚園の保母を勤めており、ミス・ポートルの依頼で金沢に赴任したものと思われる。〉(小林恵子 同上, p. 216)

(注)1890年9月、桜井女学校と新栄女学校は合併し、女子学院と改称した。これに伴い、幼稚保育科は保母練習所と改称され、2年課程となった。

さて、1892年に婦人宣教師ミス・ラファティ(Miss Lafferty)が派遣されてきた。それでミス・ポーターは幼稚園の運営を彼女に任せた。

当時の園児の数は18名であった。その頃の状況についてミス・ラファティが海外伝道局にこのように書き送っている。

〈子供たちにキリストの生涯について毎日教えていますが、幼いながらよく聖書の真理をつかむのは、見ていて感心させられます。〉(Annual Report; 1894)

なお、この記事のすぐ後に、子供たちの親の中に、子どもを通じて教会に導かれた人も何人かあったこと、ミス・ポーターやミス・ラファティなどが教会の日曜学校で活躍していることなどについても記されている。

1893年7月になってミス・ラファティが結婚のため辞任した。彼女の後任が見つからなかったのもミス・ポーターはやむなく小学校と幼稚園の両方の運営に当たった。

1893年9月には行山鈴野が主任保母となった。行山は金沢女学校の第一回卒業生であり、卒業後

英和幼稚園を創った婦人宣教師

に女子学院保姆練習所で2年間学び、そこを卒業して英和幼稚園に着任したものである。

(注)このことによって金沢女学校の卒業生が英和幼稚園の主任保母になるという新しい道が拓けたのだが、その女子学院保姆練習所は1898年に廃止となった。創立者ミセス・ツルーの女子大学設立の構想が挫折したこと、彼女が婦人宣教師を辞任したこと、そして1896年4月に天に召されたことがその要因である。そのため、英和幼稚園はその他の保母養成機関を探さなければならなかった。

1895年度の園児の在籍数は20名であり、この数から幼稚園が順調に推移していたことが判る。

ところが1899年8月になって「文部省訓令第12号」が布告された。それには〈一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最モ必要トス、依テ官公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許サザルベシ〉とあった。またこれに伴う「私立学校令」の第八条には、〈学校の設立と校長選任の認可や教員資格などの規制で……教師について「国語に通達」する要件を入れて外国人の排除を策し、[私立学校で]「学齢児童……を入学せしむることを得ず」として小学校教育を締め出した。この後者の一項は、キリスト教主義学校に大きな打撃を与え、その経営する小学校を壊滅の危機に追い込んだ。……英和小学校も[校名を「英和学校」と改変し]組織替を行ってなどようやく危機を免れたのであった。〉(「北陸学院百年史」, p. 93)

(注)1900年4月に「金沢女学校」が「北陸女学校」に校名を変更したのも、この「文部省訓令第12号」の影響があったものと考えられる。

ミス・ポータが受けた打撃は甚大で深刻なものであった。しかし彼女は悲嘆の中であってなお感謝の祈りをささげた。

〈私たちの苦悩は大変なものです。しかしこれまで神は私たちの叫びを聞き、私たちの手にゆだねて下さった愛する子供たちに神のこたえを教え続けることを許して下さいました。そして私たちの手にゆだねて下さった大切な子供たちに神の言葉を教える^{わざ}業を続けることを許して下さいました。この神の守りに対して、毎日、心から感謝しています。〉(Annual Report; 1900)

ミス・ポーターはこの〈文部省訓令第12号の[とりわけ]宗教教育禁止には参ったらしい。彼女は勿論キリスト教主義教育の信念を貫き通したが、その間の心労は大変なものであった。遂に神経をやられ、小学校と幼稚園を[ミス・]ルーサーにまかせて静養した。〉(「北陸学院百年史」, p. 128) その年1900年が、彼女が来日して8年目に当たることから、1年間の休暇を取って、アメリカで過ごすことにしたのである。

(注)当時、宣教師・婦人宣教師は、8年間伝道に従事すれば1年間帰国して休暇を取ることが出来た。

彼女の休暇が終りに近づいたころ、主治医は彼女の神経がひどく病んでいるので日本での仕事に復帰するのは無理であると診断した。ミス・ポーターはなおも復帰を主張したが医者の説得はさらに強く、ついに1901年4月、彼女は金沢における仕事に復帰することを断念、辞表を海外伝道局に提出し、受理された。

(注)日本において宣教と教育に従事したいというミス・ポーターの悲願は、その後1909年に再び婦人宣教師として来日することによって果たされた。その後の19年間、彼女は兄が伝道していた京都において、室町幼稚園や西陣幼稚園を設立し、保育に当たった。

梅 染 信 夫

XVI ルーサー園長とフルトン園長の時代

1901年(明治34)9月からミス・ポーターの後を継いで幼稚園長となったのがミス・ルーサー(Ida R. Luther)である。彼女は1898年に来沢し、ミス・ポーターを助けていたので、引継ぎはスムーズに行われたものと思われる。その年の「長老教会年報」の中で、ミス・ルーサーは、英和学校が大体順調な推移をみていることを述べた後でこのように付け加えている。

〈私たちの蒔いた種が、将来、間違いなく、実りあるものになると信じます。これらのいと小さき者を教え導き、その人格を形成するというこの仕事ほど大切なものは他のどこにもありません。これらの子供たちは将来、必ず、日本のために、その能力を発揮し、影響を与える人間になると思います。〉(Annual Report; 1901)

ところがこの年の4月になると、行政の方から、英和学校の新入生の入学の許可を取り消すと言ってきた。しかし、英和学校側から、一旦行政が許可し、英和学校に入学させたという既成事実を示したことで、問題は沙汰やみとなった。しかしこのような「国家主義的」傾向はその後ますます強くなり、情勢はいよいよ深刻なものとなった。その結果、小学校の生徒募集が困難となり、1903年3月、ついに英和学校は廃校の止むなきに至った。

アメリカの静養先でこのことを知らされたフランシナ・ポーターは、一晩中泣きあかしたと伝えられている。

(注)フランシナ・ポーターが金沢における仕事に復帰することを断念した要因の一つがこの事態の推移にあったことは言うまでもない。

このようにして、北陸に初めて誕生したキリスト教小学校はその17年間の幕を閉じ、それから58年後の1961年(昭和36)の北陸学院小学校再興の日まで空白の時が流れることになる。

一方、幼稚園の方は、行政から、宗教色をなくして公立の幼稚園になるよう勧誘されたが断わるという一幕があったりしたが、従来どおり活動していた。いや、むしろ、この頃から、どうした訳か、以前にも増して園児の数が増える傾向となった。

1902年4月には申し込み数が多かったので43名に限り入園させた。

この年8月、北陸女学校の校長ミス・ショー(Kate Shaw)が病気のため辞任したので、ミス・ルーサーがその後任となり、幼稚園の方はミセス・フルトン(Amy S. Fulton)が担当することになった。ミセス・フルトンは夫のフルトン(George W. Fulton)宣教師とともに1889年に来日し、1900年に金沢に赴任して来ていたのである。

1903年度も希望者が多かったので入園者を40名に限定せざるを得なかった。

この頃、一人の園児の父がミス・ルーサーに話した話が記録されている。

〈ある日、幼稚園に通っている娘の明るい顔とつぶらな瞳を見ていて、「この可愛い子どもはわたしをキリストに導いてくれた。娘にはお母さんも、それから乳母も同じように導いてほしい。二人が教会で洗礼を受けることになれば、娘にも洗礼を受けさせたいと思う。そうなれば、わが家はみなキリストに結ばれた家族になるのです。〉(Annual Report; 1903)

ミセス・フルトンの英和幼稚園における働きは1902年から05年までの3年間であったが、園児数40名の定員はいつも満員の形で推移した。

XVII ジャネット・ジョンストンの背景

1905年(明治38)にミセス・フルトンは夫のジョージ・フルトン宣教師の転任に伴い園長の職を辞した。その後任となったのがジャネット・ジョンストンである。

ジャネット・ジョンストン(Janet M. Johnstone)は1873年4月にカナダ、オリリア(Orilia)の裕福な農場主の娘として生れた。3人の兄弟と4人の姉妹があった。

先祖はスコッチ・アイリッシュ(Scotch-Irish)で、一家はみな長老派の教会の信徒であった。

(注)カナダはイギリス領であった時から人口のほとんどがキリスト教徒であった。カナダにおいてメソジスト派、会衆派、長老派などが合同して合同教会を組織したのは1925年のことである。その他にローマ・カトリックや英国教会の信徒もいた。

スコッチ・アイリッシュとは、北アイルランドにいた長老派のスコットランド人の子孫であるが、18世紀前半だけでも、25万人ものスコッチ・アイリッシュがアメリカ大陸およびカナダに移住したといわれる。

オリリアはオンタリオの州都トロントの北方約100キロのところに位置し、五大湖に注ぐシムコ湖のほとりにある美しい町である。1839年にこの町が創設された頃はスコットランド、イングランド、アイルランドからの移民がほとんどであったらしい。すぐに農園や果樹園が開拓・開墾され、やがて製粉所ができた。当時の人口は2000～3000人ほどであったと思われる。

ジャネットは地元の初等学校を出たあと、中等学校に進み、そこを18歳で卒業し、次いで州立のトロント大学に進学した。

(注)「北陸学院百年史」(p. 167)に「18歳でカレッジを卒業し、23歳で高等師範学校を卒業」とあるが、当時カナダ、オンタリオ州の初等学校を卒業するには最低8年、中等学校を卒業するには最低5年を要した。また、オンタリオ州にあり、男女共学、5年間で初等・中等学校の教員資格を取得できる教育機関は州立トロント大学(University of Toronto)と州立クイーンズ大学(Queen's University of Kingston)だけであった。すなわち学部課程を修了した後、教職(師範)課程を履修するのである。彼女に来日を薦め、金沢女学校に紹介したと思われるミセス・ダンロップ[1898～1903年北陸で伝道に従事したジョン・ダンロップ宣教師の夫人]の略歴にも「クイーンズ大学及び同師範学校の出身」(「梅光女学院史」, 1934, p. 479)とあり、ジャネットの方はトロント大学で学部と教職課程の両方を継続して履修したのに対し、ミセス・ダンロップの方はクイーンズ大学の学部を卒業した後にトロント大学で教職課程を履修し、そのようにして教員資格を取得したものと思われる。

トロント大学は1827年に英国教会の補助によって出来た大学で、もと King's College と呼ばれたが、1849年に英国教会から援助されなくなり、やがてヴィクトリア大学や「長老派の」ノックス神学校などが加わってカナダを代表する名門校となったものである。

広大な緑のキャンパスの木立ちの間に点在する校舎を行き来して、ジャネットは5年間、勉学に励み、1896年、23歳のとき、教員資格を取得してこの大学における勉学を終えたものと思われる。

彼女の学んだ教職課程の科目は当時のアメリカの大学におけるものと大差なかったであろう。それはトロント大学の名に恥じない学問的、先進的なものだったであろう。ジャネットはそこで幼児教育、初等教育、そして中等教育の教育理論について学び、指導技法を習得したものと思われる。

卒業後、彼女は郷里オリリアに帰った。そして6年半ほど、その初等学校で教師をしていたが、外国における女子教育ないし幼児教育を行う婦人宣教師になる志を立て、ついに教師を止め、「おそらくトロントにあったと思われる」伝道学校に入学して神学を学ぶことになった。

(注)彼女にこの決断を促したものが何であったか明らかではないが、上の注記にあったミセス・ダンロップがトロント大学の先輩に当たることから、彼女がジャネットに婦人宣教師として来日するように勧め、一方、金沢女学校に対してジャネットを紹介した可能性がある。

彼女は、伝道学校を卒業すると直ぐに米国長老教会海外伝道局に申請し、フィラデルフィア婦人伝道局婦人宣教師に任じられ、直ちに来日した。それは1905年(明治38)、彼女が32歳のときであった。

その年の12月、彼女は金沢にやって来た。そして北陸女学校の教師として着任した。

ところが同じ月に、ミセス・フルトンが夫の転任に伴い幼稚園の園長を辞任したことから、にわかに、彼女がその後を引き継ぎ、北陸女学校付属幼稚園の園長をつとめることになった。

XVIII ジャネット・ジョンストンの人柄と教育観

ミス・ジョンストンは地味であるが堅実な努力家であり、多くの人々の信望を集めた。彼女には豊かな教養、確かな記憶力、また広い知識があり、短時間で日本語に習熟して人々を驚かせた。当初から日本の文化を尊重し、日本人の思想を理解しようと努めた。それが教育や伝道に役立つと信じていたからである。例えば、彼女は、日本語の「義理」という言葉を取り上げ、西洋には「義務」(duty; responsibility) はあっても「義理」に当たる言葉がないと指摘したりした。

彼女はユーモラスで、いつもニコニコしていた。ある時、一人の外人が「ノゾミ -- 希望 -- 」と題して講演し、その中で「人それぞれネズミがある。高いネズミと低いネズミがある」と言った。北陸女学校の生徒と一緒にこれを聞いていたミス・ジョンストンは、その講演の後で、「高いネズミ15銭、低いネズミ1銭5厘」と言って生徒を笑わせたという。

彼女は学校経営に関して、継承する面と改革する面の両方を重視した。1908年3月の修業式に彼女は[北陸女学校]校長代理として「教育の目的」と題し式辞を述べたが、以下の抜粋の中にも、彼女の教育観を垣間見ることが出来るであろう。(注)通訳は金沢女学校英語科を卒業した教師島倉ふさであった。

〈今日は教育といふことにつきしばし諸子にお話ししたう存じます。諸子は此學校で教育を受けて居るゝ方々であります。諸子は御自分が此學校へ來られし理由をまじめに思考なされたことがありますか。……英国の一大教育家ハルバート・スペンサー氏は「教育の目的は吾人を完全なる生活に適せしむるにあり」と申されましたが實に當を得たる定義でありまして、何故に教育の標準が時代と國々とによりて異なれるかを能く説明するのであります。

文明開化を知らざりし古代人民の生活の有様は極めて單純なものであります。衣、食、住の三字が其意義の全体を表すに足るのであります。故に鳥獸を獵り、魚を釣り、家屋を建築するなどの事を男子の教育と見做し、料理や子供の世話を習ふ事を子女の教育と考へたのであります。現今でもある野蠻な國々では矢張りこのやうな標準を有してをります。然し國々が文明になるにつれて生活が複雑となり従つて教育もまた複雑となりました。現今の一女子が其前途の生涯に自分を適せしめるには、其祖母などの若かりし時代には全く不必要なりし事物までも學ばねばなりません。

かくの如く諸子の教育が實際に複雑であるが故に、父母も、教師も、學生も教育といふものゝ確然たる目的を有して其れがために勉勵するのは至當のことではありますまいか。度々目的なしに教育を受け、或は父母、教師、學生が各々自分勝手なる目的を有するために、多くの元気が徒費せられ又一致を缺くが故に教育は其實力を失ひます。「我等は總時世の嗣子なり」とはテニソンの名言であります。如何にも眞實で益多き言葉であります。又此は我らには貴き高尚なる遺産であります。過る時代には多くの偉大なる人物や大教育家が世に現はれましたが、私共は其中の最高最良なるものを撰んで自分たちの理想と致しませう……

次に、如何に學ぶべきかといふことを考えますと、まづ第一に注意深く、思慮深く學ぶことであります。……第二には何事を學ぶにも十分に學ぶことであります。……第三には凡ての課目に同様に能く熟達し得ないことを以て心を悩してはなりません……

願くは諸子には新學年の業を注意深くかつ十分に修めんとの確實なる目的を有して歸校せられ、やがて

諸子も目出度き卒業の榮を得らるゝ時來らば、過る四年間の準備と据ゑられし基礎とを顧みて、諸子は己れのベストを盡しゝ事を喜び、教師は得意と満足とを以て諸子を祝し、共に喜び得るに至らん事を切望致します。かゝる準備の時代を経られてこそ、諸子は世に出で、高潔なる生涯を築き建つるを得、而して此世にも彼の世にも譽と榮とは諸子を幸福ならしむるのであります。》(「北陸学院百年史」, pp. 168-72)

XIX ジャネット・ジョンストンの働き

ミス・ジョンストンは金沢女学校に着任した翌月つまり1906年(明治39)1月にミセス・フルトンから英和幼稚園を引継ぎ、それ以降、1921年までの15年間、園長としての職務を果たした。

以下、この期間における重要事項とそれに関わる彼女の働きについて簡略に述べる。

①J. K. U. に加盟

J. K. U. (Japan Kindergarten Union)とは「日本キリスト教保育連盟」(日本各地に点在するキリスト教幼稚園、保育所、保育者養成機関の連絡統一機関)の略語である。その目的は〈幼い子どものための仕事を効果的に進めるため、在日外国人保育者が相互に話し合い、連携し合う〉(「日本キリスト教保育百年史」, p. 118)ことであり、1906年に設立された。

その初代会長となったミス・ハウ(Annie L. Howe)は第一回年次総会の挨拶の中で〈現在、私たちが一番切実に探し求めているのは、新しい織紙や縫いとりの本ではなく、積み木やゲームの本でもありません。求めているものは心理学、哲学、教育学、科学、文学、芸術といった分野の本なのです〉(「日本キリスト教保育百年史」, p. 122)と述べ、ここに在来フレーベル主義を超えようとする意欲が認められる。ミス・ジョンストンはこの趣旨に賛同し、英和幼稚園は1907年からこれに加盟した。

(Second Annual Report of J. K. U. [1907-08], p. 21)

②英和幼稚園の園児数を70名に改定

ミス・ジョンストンの1909年 J. K. U. 年報によれば、その年度から英和幼稚園は園児数を70名に増員し、その数の園児を入園させたが、他にまだ入園を待っている子どもがいると記されている。

③北陸女学校の卒業生、主任保母となる

同じ J. K. U. 年報に〈ミス・カノ[カトーの誤り]は1月まで主任保母を勤め、京都へ転任となり、ミス・タカタが職務を継いだ。彼女も「頌栄保母伝習所」の卒業生である〉(Janet M. Johnstone's Report, March 1910)とあるが、この頃から北陸女学校の卒業生が頌栄保母伝習所に入学し、2年の課程を修了した後、英和幼稚園の主任保母になる者が出るようになった。例えば加藤貞(北陸女学校1904年卒)、高田まさ(1906年卒)、大山とく(1907年卒)、高村田鶴(1908年卒)などがその例である。

(注)頌栄保母伝習所と頌栄幼稚園は、神戸基督教会婦人会によって発案され、シカゴの私立幼稚園の園長だったアニー・ハウ[上記]を招いて1889年に設立された。

ハウはキリスト教を基盤としたフレーベル思想の信奉者、また忠実な実践者であり、フレーベルの教科書「人の教育」と「母の遊戯及育児歌」を初めて和訳するなどわが国の幼児教育に貢献した。

④北陸女学校の卒業生、保母となる

1911年(明治44)の「長老教会年次報告書」の中で、当時、金沢ステーションの責任者であったダンロップ(John G. Dunlop) 宣教師が〈本年[英和]幼稚園はきわめて評判が良い。[北陸女学校で]

梅 染 信 夫

養成された幼稚園保母はみな誠実なクリスチャンとなり、保育の仕事に就けることを心から喜んでいる(Annual Report; 1911)と報告しているが、これは北陸女学校において英和幼稚園保母が養成されていたことを意味する。その保育科目を教えていたのは勿論ミス・ジョンストンであった。

彼女が教えた保育科目は形式的フレーベル主義を踏襲するものでなく、また1899年文部省によって制定された「遊戯、唱歌、談話、手技」という規定の枠に縛られるものでもなく、その学識と経験と感性に基づき、子どもの心理と生活を中心にしたものであったように思われる。

1914年にミス・ハウは J. K. U. 年報に「アメリカにおけるモンテッソーリ・メソッド」という論文を書いたが、ミス・ジョンストンも、モンテッソーリなど新教育理論について研究を怠らず、それが彼女の指導する保育科目の指導に反映していたことは想像に難くない。

(注)モンテッソーリ(Maria Montessori, 1870-1952)はイタリアの婦人教育家。彼女は「幼児期を発達上の独特な敏感期ととらえ、子どもが本来もっている内発的生命力と吸収力を重視し、自立性の発達を強調した。」(西頭三雄他「保育内容総論」, 1994, p. 44)

ミス・ジョンストンから学び、英和幼稚園の保母となった人たちの名が分かっている。1912年までの卒業生は、上記③の4名の他に、長尾甲、安田ふき、山村かしこ、内藤徳、三竹よし、竹村しき、村井ふき、山口ときわなどである。(『北陸学院百年史』, pp. 757-58)彼女たちはみな申し合わせたように洗礼を受け、キリスト者となった。彼らは「少数精鋭」であった。彼女たちは[下記⑦にある]三つの幼稚園合わせて130名にのぼる園児を懇切丁寧に指導した。実に彼らは幼稚園の保育によってキリスト教伝道の一翼を担ったのである。

⑤「英和幼稚園」を「北陸女学校附属幼稚園」と改称

1912年の「長老教会年次報告書」の中でダンロップ宣教師は、1912年3月に「英和幼稚園」が「北陸女学校附属幼稚園」と改称されたと報じ、『北陸学院百年史』は〈本校(北陸女学校)と英和幼稚園は元来姉妹学園以上の密接な一体関係にあった。教育に関する主義方針が全く一致しており、同じ長老教会のミッションに属して人的にも深い交流をもち、経営は全く異なる主体を保ちながらも、相互の協力関係は強いものがあつた。それが1909年[明治42]に幼稚園長のミス・ジョンストンが女学校長を兼務するに至り、更に両者の関係は密接強固なものとなった〉と述べているが、このことはさらにその後の「北陸学院保育短期大学」への発展を示唆するものであつた。

⑥日曜学校へ来る幼稚園児に対する妨害

ダンロップ宣教師の「1912年度年次報告書」の中に、その年4月に50名の園児が新たに入園、その半数が5歳未満だったとある。そのためか、40人もの父母が幼稚園の保育の様子を見るために詰めかけて困っている。そうでなくても、その頃、恐ろしい話が巷に広まっていると報告している。

〈時々、私たちについて恐ろしい話が広まり、子供たちが[日曜学校に]来るのが怖いと言っています。つい最近も、とても奇妙な話を聞きました。「日曜学校に行くとクリスマスに何か恐ろしいことが降りかかります。その日には、日曜学校の先生が棍棒をもって近づいて来て、日曜学校に行く子どもたちの頭を叩きつける」というのです。〉

⑦富山と高岡における幼稚園の開拓

同じ1912年(明治45)の「年次報告書」の中でダンロップ宣教師は、また、次のように報告している。

〈実り多い福音宣教の一部が、長い歴史を誇る北陸女学校と金沢、富山、福井にある三つの幼稚

園によって担われている。)

ミス・ジョンストンは1908年頃から富山市と高岡市へ度々行くようになった。そこにおける幼児教育の必要性を感じ、そこでの幼稚園の開設の可能性を探るためである。

彼女は、富山伝道教会と高岡講義所の牧師や信徒の人々と相談し、1910年(明治43)には富山に「富山幼稚園」(正式名「北陸女学校付属第二幼稚園」)を開設した。その富山幼稚園は、1911年3月には8名の卒園児を出し、残った在籍園児数は34名であったと記録されている。1912年に婦人宣教師ミス・ギブンス(Miss Gibbons)が金沢ステーションに加わったので、彼女が富山幼稚園の主任として働いたが、そこにおける伝道と教育の難しさと苦心の程を次のように記している。

〈園児の家庭は、大部分が厳格な仏教信者で、ここまで築き上げるのはなかなか大変だっただろうと思われるほどお金持ちの商家が多い。運動会、卒園式、始業式、クリスマス、花の日などの行事には、つとめて父兄を招待し、偏見をなくするようにしています。最初のクリスマスの会には15人しか来なかったのに、去年は父兄が60人以上も出席し、その中の何人かが子供たちのためにと少額でも寄付してくれました。〉(Annual Report; 1912)

「高岡幼稚園」について『高岡教会小史』は次のように述べている。

〈大正元年[1912]一二月……北陸女学校附属第三幼稚園を、高岡伝道館に設立すべき申請が出されている。それを受けて、大正二年一月……には、その申請が……認められた……また、二月……には、四月より開設の、第三幼稚園の準備をするために、ジョンストン宣教師、内藤徳、木村信子の三女史が金沢から出張してきた。そして、伝道館を仮保育室にして、保育を開始した。飯島牧師は、金沢よりの三女史と、園児予定者の父兄と一緒に懇話会を開いた。出席者は七〇名である。四月まで木村信子は保母囑託になり、柳孝子は助手になって働いた。その後、第三幼稚園は、大正九年[1920]に富山にあった附属第二幼稚園がなくなった関係上、附属第二幼稚園と名称を変更し、昭和一六年[1941]二月、日本基督教会高岡教会附属坂ノ下幼稚園となり、現在は、社会福祉法人坂ノ下保育園として存在している。〉(『高岡教会小史』, 1986, p. 13)

ミス・ジョンストンは金沢、富山、高岡の幼稚園を週1回、巡回しながら、保母を指導し、自ら幼児の保育に当たった。[1917年以降、一時期、高岡に住居を移して指導・保育に当たったこともある。]

これら三つの幼稚園の保母はすべて北陸女学校の卒業生であった。

XX 結論 英和幼稚園のキリスト教教育

およそ120年前、北陸の地に呱呱の声を上げた英和幼稚園がなぜわが国最古の幼稚園として今日まで存続してきたか。それは、これまで見てきたように、主として3人の婦人宣教師たちの献身的な働きによってその基礎が築かれたからである。

フランシナ・ポーターは英和幼稚園を発想し、実現させた。エリザベス・ミリケンは保育内容を設定し、主任保母を育成した。ジャネット・ジョンストンは英和幼稚園を拡充し、発展させた。そ

梅 染 信 夫

して、彼女たちの意志は、中沢正七、ミス・ライザー (Irene A. Reiser) など次期の人たちに引き継がれ、さらに発展を見ることになる。

しかし、彼女たちは決して自分の名声を高めるために、あるいは自分の誇りのために働いたのではなかった。なぜそう断言できるのか。

彼らに共通し、その「働き」ないし「つとめ」に一貫しているものがある。それはキリスト教プロテスタントの信仰である。彼らは、教会の聖日の礼拝を厳守した。聖書を読むことと祈ることとを欠かさなかった。日毎に聖書における「神のことば」の真意を聴こうと努めた。事ごとに学校・幼稚園の子供たち、そしてスタッフ一人ひとりのために祈った。自分が「宣教師であるよう」、いや、先ず「キリスト者であるよう」祈り、求めた。彼らは、実際、「働いている」と感じていなかったのではなかろうか。彼らは「命じられたこと……なすべき事をしたに過ぎない」(ルカ17:10) と感じていたのではなかろうか。

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。(マルコ10:13-16)

幼児教育を論じる場合、決まって聖書のこの部分が引用される。フレーベルの愛誦句[p. 16]もこの聖句と関係づけられる。しかしそれがただ単に「イエスが幼子を抱いて祝福された物語」でないことを、3人の婦人宣教師たちは知っていた！聖書は、ここで、老いも、若きも、男も、女も、大人も、子どもも、わたしたち人間一人ひとりに対して、神の子イエス・キリストが「神の国の福音のことば」を告知しておられることを、3人の婦人宣教師たちは知っていた！この神の告知によってのみ、わたしたちが罪から解放され、復活せしめられ、永遠の生命が与えられることを彼らは信じていた！英和幼稚園の保育は、この意味で、まさに「キリスト教教育」であった。

「英和幼稚園という奇跡」は、実に、「イエス・キリストによる奇跡」であった。

謝 辞

この研究は北陸学院短期大学学長・同附属幼稚園園長である大隅恵子先生の勧めによって始められたものである。これによって英和幼稚園の設立の事情がより明らかになったとすれば幸いである。

外国から資料を取り寄せる際、英語コミュニケーション学科の朝倉秀之教授にご助力いただいた。心から感謝申し上げる。

引用させていただいた文献・資料の著者・研究者すべての方々に感謝の意を表します。

文献・資料を閲覧させていただいた北陸学院短期大学ヘッセル記念図書館、横浜開港資料館、石川県国際情報ライブラリー、金沢市立玉川図書館、金沢大学附属図書館、富山大学図書館、同志社大学図書館の司書の方々に感謝いたします。